

# 2024年度 八戸学院大学短期大学部

## 幼児保育学科・介護福祉学科 一般選抜Ⅰ期

### 国語

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ぐずぐず」とは、①ケツダンがつかず決着を引き延ばしているうちに、やがて「自然」に引っぱられ、流されてゆく、そんな予感に包まれた人のためらいや逡巡を表す。身を引き裂かれる思いにさらされながら、情けないことにいつまでも決心がつかない。A のままだから、当然、力が入らない。力が入らないまま、そのだれた姿をそのまま晒す。辛気くさいほどのろろしているし、なにやらぶつぶつ言うばかりで、いつまでたっても言い分が聞こえない。そう、「ぐずついた天気」のようにいらいらさせる人。はきはきせず、切りがつかず、しまりもなく、ただただおなじところを堂々巡りするだけで、それでも焦りはしない、そういう輩にかぎって、聞き分けがなく、1陰気にごねる。つまり、「ぐずる」。

B、「ぐずぐず」と思い悩むことは、わたしたちが手放してはならない2権利の一つである。それは、問題を前にしてじぶんの意志を決める前に十分な時間的猶予を与えられる権利であるといってもよい。これが権利とみなされるべきであるのは、ひとがなにかある重要な問題について意見を、あるいは意志決定をもとめられながら、じぶんでもよく問題がつかめないときに、それについてもっと多くの情報を得るための時間、あるいは他人の助言や②センモン家のセカンド・オピニオンを十分に得るための時間、じぶんが言い淀んでいることや迷っていることを他の人によく聴いてもらえる時間、そしてそのなかでやがてある決定を下せるようになるまで、ああでもない、こうでもないと思いつ悩むそのプロセス——このプロセスはいつでも訂正可能なふうにかかれていて——を認められねばならないからである。

これを権利と捉えるにあたって③ギモに銘じておきたいのは、理解というものがC 的なものだということだ。たとえば若いころにもし答えが出なければ生きてゆけないとまで思いつめていた問題が、歳を重ねるとともに色褪せて見えてくることがある。あるいは、あのときはわからなかったけれど今だったらわかるということも起こる。さらには、一つ見えてしまうとそれが他の問題に④ハキユウし、他のあらゆることがらをもういちど一から問いなおさなければならなくなるということもある。それらの過程で、内なる⑤テイコウも幾度となく起こる。このように理解というものはジグザグに進んでゆく。ここでは、すかっと噛み切れる論理より、いつまでも3噛み切れない論理のほうが、重い。滑りのよい言葉には、かならず、どこか問題を逸らせている、あるいはすり替えているところがある。理解には、分かる、解る、判る、あるいは思い知る、納得するといったさまざまな様態がある。そのあたりのことが見えてくるまで、ぐずぐず、しこしこ4考えつづけ

るところにこそ、「哲学すること」の強度もある。時代はなかなかそれを許そうとしないが、その時間を削ぐことだけはしてはならないとおもう。その時間こそ人生そのものなのだろうから。

鷺田清一『哲学の使い方』より

注1 素頓狂<sup>11</sup>すつとんきょう。ひどく調子はずれで、間の抜けた様子。

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 Aに入る語として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 手放し    イ 宙ぶらりん    ウ わがまま    エ こま切れ    オ 悲観的

問三 Bに入る語として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア なぜなら    イ ともかく    ウ そのため    エ いまでは    オ けれども

問四 傍線部1「陰気」、傍線部2「権利」の対義語を書きなさい。

問五 Cに入る語を文章中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

問六 傍線部3「噛み切れない論理」という比喩表現の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 説得力のない論理
- イ 理解できない論理
- ウ 共感を得られない論理
- エ 正当ではない論理

問七 傍線部4「考え続ける」ことについて、あなたの考えを百字以内で書きなさい。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【ふみえ 芙美恵の年老いた父は、母が亡くなった後、介護施設に入居していた。】

師走が近い。介護施設のなかも、はやばやと金銀のモールや豆電球のイルミネーションで、クリスマスの飾りつけをしてあった。

芙美恵は昔、オルガンを習っていた。「メリーさんのひつじ」や「ロンドン橋落ちた」などの①カントナ曲をどうやら弾けるぐらいのころ、クリスマスが近づいて「きよしこの夜」の練習をはじめた。

ある晩、仕事からもどった父が「おとうさんもクリスマスの曲を弾けるぞ。」と②ジマンそうに云った。鍵盤などさわったこともないはずの人がそのときもドの鍵盤を芙美恵に確認するほどだったのに――オルガンに向かった。

右手の人差し指だけで「もろびとこぞりて」のはじめの一小節を弾いたのだ。

たしかに「もろびとこぞりて」だった。①芙美恵はびっくりした。思いがけなかった。口のなかで歌詞にあわせて拍子を取りながらドシラソファミレドと弾けば「もろびとこぞりて」になるのだ。

その単純さと意外さに、芙美恵はよっほど、とびきりの笑顔を浮かべたのだろう。また、それを見て父もうれしかったのだろう。よろこびがあふれた。母がこしらえたチキングリルが、ことのほかおいしかった。

②同じ手は一度しか通じないのに、その後もクリスマスのたびに「おとうさんも弾けるぞ。」と去年のことを忘れ去ったかのように、父は何度でもくりかえした。芙美恵はあるとき「それはもう知ってるよ。」と素っ気なく云い、ドシラソファミレドと自ら鍵盤をたたいて、つづきも弾き、父のささやかな楽しみを奪った。

なぜ、同じことをくりかえすのか不思議でならなかった。③シシユンキにさしかかかっていて、芙美恵は父をうっとうしくさえ思った。いっしかクリスマスの夜をいっしょに過ごすこともなくなった。

あれから長い時が過ぎ、いまは芙美恵にも父を労る気持ちがある。だが、彼女の職場は④サイマトツが稼ぎどきで休みをとりにくい。クリスマスの直前になって、ようやく時間をみつけて施設に電話をかけた。職員の人に、父を呼びだしてもらった。電話の向こうから「もろびとこぞりて」が聞こえてきた。施設でもクリスマスソングを流しているのだ。

けれども父はなにも反応しない。ポケてしまったのかと芙美恵は不安になり、「おとうさんの弾ける曲だね。」とほのめかしてみる。すると父は「ああ、だけど芙美恵のほうがうまいからな。」と遠慮がちな声で云った。

芙美恵は、やっと自覚した。父に弾かせずに、自分が最後まで弾いてしまったあとき以来、父はもう「もろびとこぞりて」のことを口にしなくなっていたのだ。

父が弾く「もろびとこぞりて」をはじめて聞いたときの芙美恵が、どれほど輝く目をしていたのか、どのくらいとびきりの笑顔で父を見つめたのか、彼女は⑤キオクをたどってそのときの表情を思いだそうとした。3いまの自分の顔は見たくなかった。

目が潤んでくる。芙美恵はハンカチを取りだそうとして上着のポケットに手をいれた。プラスチックの星が出てきた。油性ペンでスマイルマークが描きたしてある。子どものときの彼女のいたずら描きだ。小さなしあわせで、いっぱいだった。

ドシラソファミレド。4芙美恵は電話に向かい父に聞こえるように口ずさんだ。

長野まゆみ『ささみささめ』より

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部1「芙美恵はびっくりした」とあるが、芙美恵はどのようなことに驚いたのか。次の□にあてはまる言葉を文章中から七字で書き抜きなさい。

指一本で曲を弾いてしまえることの□。

問三 傍線部2「同じ手」とあるが、具体的にどのようなことか。三十五字以内で説明しなさい。

問四 傍線部3「いまの自分の顔は見たくなかった」とあるが、それはなぜか。□に当てはまる言葉を文章中から十四字で書き抜きなさい。

□ ことに無関心でいた自分を責めているから。

問五 傍線部4「芙美恵は電話に向かい父に聞こえるように口ずさんだ」とあるが、このときの芙美恵の気持ちとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 無邪気に人を驚かせて喜んでいた父への好意。

イ 楽しかった過去の記憶を失ってしまった父への哀れみ。

ウ 幼い自分を一生懸命喜ばせようとしてくれた父への感謝。

エ 互いに心が離ればなれになってしまった父への謝罪。

【Ⅲ】次の文の傍線部が慣用句となるように  にあてはまる言葉として最も適当なものをあとのア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① やつと結果を出せて  がすく思いだ。

ア 髪      イ 胸      ウ 背      エ 腕

② 睡眠を充電と称するのは言い得て  だ。

ア 妙      イ 上      ウ 良      エ 百

③ 高価なものを買うときは、つい二の  を踏む。

ア 手      イ 心      ウ 足      エ 板

【Ⅳ】次の四字熟語の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。(解答欄には二字だけ記入)

① 困難な問題にも泰然ジジヤクとした態度で対応する。

② 自信家である彼は、タイゲン壮語を吐くときがある。

③ 緊張してシリ滅裂なことを言ってしまった。

〈問題終了〉